
クリスマスが明けるまで

夏白

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クリスマスが明けるまで

【NZコード】

NZ115N

【作者名】

夏白

【あらすじ】

クリスマスの夜に絶対に同じ夢を見る「私」の話。
三時間くらいで書いたので内容が荒いかもせんがご容赦ください。

クリスマスになると決まって特別な夢を見る。何で正月じゃないんだろうと思いつながら、今年も布団に潜り込むとすぐに眠りがやつてきた。

夢の中の私には寒さがないけど周りの物には好きに触れたりできる。意識しなければ壁を抜けてしまうけれど。それから空も飛べるし、味覚も寒さも感じる。けれどその感触はちょっとだけ遠くて、薄い膜ごとに触っているような感覚。

そして、夢の中の私はたくさんの方に会う。それはすれ違ひから分かれようとしているカップルを見つけたり、夜這いをかける不届き者を見つけたり、雪に埋まつて今にも死にそうな人を見つけたりと様々だ。

今日は何があるんだろう。

夢の中の世界は毎回同じだった。雪が深く、急な屋根。石造りの家は綺麗に並び、街の人達が外にお祭りをしている。

毎回、少しずつ変わる催しを探すのが楽しくて、ちょっとだけわくわくした私の目にとてもたくさんの明かりが灯る城が映った。あの城も毎年違う催しを出していく楽しいのだが、私の気分は急降下。何か違和感を感じたのだ。そういうときは、決まって良くないことが起こる。

放つておくるのも気分が悪いので仕方なく城に入り込めば、真っ赤な絨毯に整理された調度品、綺麗な壁。楽しそうな音楽とお喋りが漏れる部屋にたどり着いた。

まっすぐ壁を突つ切つたので十秒も経つてないだろう。頭上から踊つている人々を見下ろしながら違和感がちょっとだけ不安に変わつた。こうこうときは危ない」とが起つるのである。

きょりきょりと周りを見回せば不自然に揺れるシャンデリア。それをつる巨大な鎖の一部に深い切れ込みが入つていた。このままだと下にいる人に落ちてしまう。傷がついてひびがはいり、それが広がつてしまつたのだろうか。

けれども直す工具もないし、今にも落ちそうだ。

さて、どうしようか？　と首をかしげたとき、嫌な音と共に鎖が切れた。

あ、と下を見れば、驚いた男女が立つてゐる。私は素早く落ちるシャンデリアをつかむと、彼らに当たる直前で持ち上げた。

(うーん、グッジョブ!)

男性が女性を庇つように伏せているのに親指を立てながらゆつくりとシャンデリアを会場の端っこに下ろすと、切れてしまつた鎖部分を持ってきて彼らの前に置いた。

また傷んでる物があつたら危ないだろうじ。

私はそのまま城の中をぐるっと回ることにした。ちなみに城の中で毎回行くのは厨房である。

今日も「お好きにお取り下さい」と書かれた紙の上のひつたお菓子の籠を発見すると中からキャンディを一個取り出し口の中に放り込む。

(まづいー)

べつと「ミミ箱に吐き捨て次の飴へ。いつもならもつたらないのでやらないがここは夢だ。夢の中今まで不味い物は食べたくない。いくつかある中でほろ苦いなめらかなチョコレートとミルクが混ざり合い、絶妙なハーモニーを奏でる至高の一品を見つけて私は浮かれた。去年はどれも不味くて、腹いせにクッキーをひとつ持つて行つたのだ。

よく見ればたくさん入つてるのでポケットにいっぱい詰め込んで、籠の横にあつた紙に「飴おいしかった！」と書き込む。これは厨房のコックが感想を貢つたためにおいてある物で、じ自由に感想をお書き下さいといふやつだ。

私は上機嫌で城を回り、イルミネーションやツリーを見ると街に戻つた。街の装飾もなかなかの物で大通りを外れたちょっとした場所でも可愛い飾り付けなどを見つけられるのだ。すごいぞ、凄いやる気だぞ。

それからちよくちよく迷子と埋もれた人や、滑つて転びそうな妊婦さんを助けたりした後にゆっくりと空が明るくなつてきた。

夜明けだ。

夢が覚める時間が来た。
私はゆっくりと目を開けた。

「怪我はないか」

「ええ、あなたが庇つて下さつたから。でも、さつきのは何？ 突然シャンデリアが動き出して……」

「大丈夫、あれは精霊様だ」

そう呟つて男はさやつと女性を抱きしめた。

「聖夜の夜にいつも遊びに来るんだ。」この日に事件があつても絶対に誰も死んだりしないんだよ。毎年遊びに来るつて言つただろ？」「それって、大司教様が召喚の儀式を行つてやつてくれるつていう？ただの噂だと思つてたわ」

「いや、本当だよ。今年も無事に召喚されたみたいだ。今頃厨房のお菓子がたくさん無くなつてるよ。……それにしても、この鎖は故意に切られた物か……。誰がやつたかあぶり出せないと云ひないな」

そう呟いた彼は周囲のざわめきを一掃するよつて顔を上げた。

「うー、おっせよーー！」

私はそつと欠伸をかみ殺した。

厨房から貰つてきたお菓子は迷子その他もうもうの事情のせいであつたく、たくさんとつてもとつてもあきつぱり無くなるつてどういつことなんだ。

毎年飴を食べようとするとき事件が起つるのだ。そして、騒動の中で落としたり、何となく上げてしまつたりして無くなつてしまつ。あつたく、たくさんとつてもとつてもあきつぱり無くなるつてどういつことなんだ。

（もつと食べたかった……）

せめて夢の中では体重を気にせず……などと嘘く私は気づかな

かつた。額につつすらと浮かんでいた模様がゆっくりと消えていくことを。

そして、一番最初に助けたカツプルの服にそれと同じ模様が刺繡されていたことも、召喚の議と言うのがその国が出来てから続いている精霊信仰で、聖夜の夜に行われる厄払いであることも私は知らない。

ふと、横を見れば黄色い包みが。これはもしやサンタクロースが！ と興奮しながら包みを開けると、欲しかった最新版の音楽プレイヤーが入っていた。色も好みである。

「ありがとーサンタ！」

そしてその礼を言つべく部屋を出た私はまっすぐ下に下りるとサンタにお礼を言つたのだった。

そしてその後、とある世界のある国で肅正の荒らしが吹き荒れたことも、私から飴を受け取った人が今年のハッピー賞を貰った事も、飴を作った料理長がちゃんと籠の飴が無くなっていることと、去年は何も書かれてなかつた紙に書かれた一言に号泣していたことなども知らない。

聖夜には不思議な事が起つるらしいことも私は知らないのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8115z/>

クリスマスが明けるまで

2011年12月25日22時56分発行